

特別支援学級における SDGs 探究学習

～総合的な学習の時間を軸とした学びの設計を通して～

国分寺市立第三中学校

主任教諭 高田 裕行

1 はじめに ―問題の所在と研究の目的・方法―

(1) 問題の所在

文部科学省（2023）の「第4期教育振興基本計画」では、社会や世界の情勢が目まぐるしく変化する現代において、子どもたち一人ひとりが未来を切り拓く主体として、積極的に課題解決を通して、持続可能な社会を維持・発展させていくことへの期待が示されている。そのような理由もあり、教育における SDGs（持続可能な開発目標）の位置付けやその意義は、ますます重要視されるようになってきている。そして、それらは特別支援学級に在籍する生徒にとっても例外ではない。障がいのある子どもたちが、社会の課題を自分ごととして捉え、他者と協力しながら自立・社会参加するためには、一人一人の個性に合わせ、教室での学びが、現実社会や日常生活の文脈とつながるような、実感を伴った多様な学習経験が求められている。しかし、SDGs に関する学習は、多くの場合、教科書のトピックスや資料の一部として部分的に取り上げられるにとどまり、継続的・体系的に学ぶ機会が十分に確保されていないのが現状である。特に特別支援学級においては、生徒の特性や理解のベースに合わせたカリキュラム設計が求められるため、たとえ優れた実践例があったとしても、必ずしも目の前の子どもたちの実態に適しているとは限らない。そこで、本実践では総合的な学習の時間を軸に、各教科（技術科・美術科・社会科）と学校行事とを関連づけた教科横断的な学びを設計し、さらに公民館や市役所など地域の方々の協力を得て、社会参加する機会を設けた。身近な題材や体験的でわかりやすい学習を取り上げることで、どの学校においても追試できる汎用性の高い実践を意識して単元を構成した。

(2) 本実践の目的・方法

本実践の目的は、特別支援学級における総合的な学習の時間において、SDGs が目指す「誰ひとり取り残さない社会」をテーマに、生徒が暮らす地域（国分寺市）の課題を「外国人」と「子どもの人権」に焦点を当て、SDGs への理解と関心を深めながら地域と持続可能な未来について主体的に考える力を育むことである。具体的には「①国分寺市が抱える課題を外国人と子どもの人権に焦点を当て学習し、その後、それらの課題に対する行政の取り組みを知るために、校外学習として市役所を訪問する。②市役所訪問を通して、外国人の方々が災害時の避難の仕方や避難所での生活に不安を持っていることを理解し、その不安を解消する一つとして避難所の貼り紙を、CANVA を活用して「外国人向け」のデザインに再構成することを試みる。③ヤングケアラーについて学習後、自分たちにできることとして、技術科で栽培している野菜を地域の子どもの食堂である「ぶんじ食堂」に寄付することで困っている子どもたちの助けになる。④誰ひとり取り残さない国分寺をテーマに

ウォールアートを制作し、その作品を社会に発信する。⑤セサミストリートを題材に誰ひとり取り残さない社会を実現する上で大切なことは何か理解する」の5つのステップを通して、教科横断的な視点から言語活動の充実を図り、持続可能な社会の創り手の育成を目指した。また生徒の振り返りを分析することで、見られた変容についても明らかにしたい。

2. 単元「笑顔でつながるウォールアートプロジェクト ―私たちが提案する誰ひとり取り残さない国分寺の未来―」

(1)単元の設定の理由

本単元は、総合的な学習の時間で実施する「国分寺学」の取組みである。国分寺の地域課題を人権教育の視点から「外国人」「子どもの人権」の二つに焦点を当てて学習し、誰ひとり取り残さない「国分寺」の姿を、ウォールアートの制作を通して社会に発信する。学習の過程で生成AIやICTの力を活用し、生徒同士が協同しながら課題の解決を目指し、単元の最後には、作成したウォールアートの掲示を国分寺市役所や公民館に依頼することを目標にしている。将来の社会生活を見据え、常に「支援される側」としてではなく、自分たちが社会に「貢献する側」になれる意識を芽生えさせ国分寺学が掲げる地域に学び、地域を考え、地域に貢献する人材の育成を目指し、本単元を設定した。

(2)生徒観

特別支援学級の中学校1年生から中学校3年生までの18名の生徒により構成するグループで本単元を学習する。3年生は、基礎学力が高く、指示を的確に理解して自立的に行動することができる。一方で、1・2年生の中には特別支援学校が適していると判断された生徒や、ダウン症、広汎性発達障害など、その姿は多様である。しかし、生徒にとって身近で「知りたい」「解決したい」と思える学習課題であれば、3年生のリーダーシップのもと課題解決に向けて取り組むことができる。ここではリアルな社会課題と接続する学習課題を意図的に設定し、「自分ごと」として考えさせることで、社会の当事者としての意識を育むとともに、社会参加をとおして、単元の目標に迫ることを目指している。

(3)教材観

本単元は、総合的な学習の時間を軸として、技術科、美術科、社会科、学校行事と連携した教科横断型の授業である。そのため、多様な視点から生徒一人ひとりの「好き」や「得意」を生かすことができるように教材が工夫されている。例えば、野菜作りに熱心な生徒を畑作業のリーダーに据えたり、ICTが得意な生徒には他の生徒より多めにデザインの制作を任せたり、丁寧さがある生徒にはちぎり絵の担当を、料理作りが得意な生徒には、「ぶんじ食堂」に寄付する野菜を使ったレシピの作成を積極的にさせることで、一人ひとりの「好き」「得意」を伸ばせるような工夫をしている。

(4)単元計画

1	授業名 : 「笑顔」でつながるウォールアートプロジェクト ～I組が提案する誰ひとり取り残さない国分寺の未来～
2	単元目標 : ・身近な題材や体験活動を通して課題と自分とのつながりを理解することができる。(知) ・課題解決に向け、試行錯誤をし、他者と協働したりしながら取り組むことができる。(思) ・社会に貢献することに「やりがい」をもって学習に取り組むことができる。(態)
(知)・・・知識・技能 (思)・・・思考・判断・表現 (態)・・・主体的に取り組む態度	

3 単元の評価基準		
知識・技能	・誰ひとり取り残さない社会の実現のためには、差別や偏見をなくし、相手の立場を想像することが大切であることを理解する。	
思考・判断・表現	・課題解決に向けて、情報を整理・分析し、追及している。 ・他者と協働し、自ら考え、試行錯誤を繰り返しながら課題に向き合っている。	
主体的に学習に取り組む態度	・社会参加を通して、社会に貢献できることを実感するとともに自らの成果や課題に気付くことができる。	
4 展開計画（全 20 時間）		
	学習活動	活動内容
第 1 次 (1～3)	○「国分寺には、どのような課題があるか？」について調べ学習をし、実際に市役所の方々に取材してみよう！	・市役所ではどのような人が働いているか調査し、新聞にまとめる。 ・校外学習で市役所に訪問する。外国人と子どもの人権について市役所の方に質問する。
	学習課題：外国人や子どもたちのために私たちができることは何だろう？	
第 2 次 (4～5)	○国分寺に住む外国の方々を助けよう！（美術科）	・外国人の方々が生活の中で不安を感じるものの一つに災害時の避難の仕方や避難所での生活がある。本時では、震災時に使われた避難所の張り紙を「どのように変えれば外国人にも正確に伝わるか？」をテーマに CANVA を用いて張り紙をリデザインする。美術での既習事項を活かし、文字をひらがなにしたり、イラストを入れたりする等、外国人の立場に立って張り紙を考える生徒の様子が見られた。
第 3 次 (6～9)	○国分寺に住む子どもたちを助けよう！（技術科）	・ヤングケアラーについて学習し、その対策として子ども食堂があることを理解する。次に国分寺市で「子ども食堂」を運営する。「ぶんじ食堂」について紹介する。話し合いを重ね、国分寺の子どもたちのために技術科の授業で栽培して夏野菜（トマト・ナスなど）を寄付することを提案する。また、野菜を寄付するだけでなく、それらを使ったレシピを考え、CANVA で作成する。ぶんじ食堂の方々をゲストティーチャーとして招待し、収穫など一緒にする。
第 4 次 (10～19)	新たな学習課題：誰ひとり取り残さない社会をウォールアートで表現しよう！	
	○誰ひとり取り残さない国分寺市をウォールアートで表現しよう！	・これまでの学習の成果を活かして、誰ひとり取り残さない国分寺をウォールアートで表現することを提案する。生徒は生成 AI を活用し、グループでまとめたキーワードをもとにデザインを生成する。その後、ウォールアートをちぎり絵で作成する。公民館や市役所での掲示を目標とする。
第 5 次 (20)	○セサミストリートをとおして「誰ひとり取り残さない社会」を考えよう！（社会科）	・セサミストリートのアニメを視聴する。このアニメには人気キャラクターのエルモの他に、自閉症のジュリア、HIV 陽性のカミ、父親が服役中のアレックスなど、多種多様なキャラクターが登場し、主にマイノリティの現実を映す設定になっている。ここでは、自閉症という設定を生徒には隠してジュリアを取り上げ、ジュリアの性格や言動についてグループで考える。表面的な言葉や態度だけでなく、その背後を想像して接することの大切さ、また誰一人取り残さない社会を実現するためには一人一人が想像力をもって他人と関わることの重要性を学習する。

(5) 生徒の意識の変容と授業の様子

ここでは生徒2名（以下生徒A、生徒Bとする）のワークシートの記述を取り上げ、意識の一端とその変容を考察する。生徒Aは、普段からおとなしい性格であり、自分から積極的にアクションを起こすことは珍しい。そのような生徒のコメントを検証することで生徒が授業を通して、「誰ひとり取り残さない社会」の実現に向け、社会の課題と自分とのつながりを知り、自分自身の行動や考え方を捉え直したかどうか推し量れるものと考えたからである。次に生徒Bは、真面目で何事にも一生懸命に取り組める生徒である。どの活動においても相手意識に基づいた言動や行動が見られ、想定以上の変容が見られたため焦点を当てることにした。4つの授業場面ごとに彼らの振り返りを見ていきたい。

授業場面	生徒A	生徒B
国分寺市役所訪問後の感想	市役所に初めて行ってみて心に残りました。国分寺市は日本語がわからない外国人のために日本語を教える機会を設けていて、外国人が安心して暮らせるように工夫していることがわかりました。	市役所は子ども食堂や外国人に優しくする制度、誰ひとり取り残さない社会を作るという目標をかかげていることがわかりました。国分寺市役所はすごいことがわかりました。市役所も綺麗でした。
避難所の貼り紙を外国人むけのデザインに見直した後の感想	災害が起きた時に、外国人にわかりやすく貼り紙を作るのが難しかったです。 どうやったら伝わりやすいか見やすくなるかすごく悩みました。 大変だったけど、一人ではなくみんなで協力できたので良かったです。	みんなで話し合っって貼り紙の作成ができました。災害が起きた時に 外国人の方があせらないように 、イラストをわかりやすくできました。またみんなで役割を決めて情報を集めることができたので良かったです。
ぶんじ食堂に寄付する野菜とその野菜を使ったレシピの作成を渡した後の感想	私は、畑で育てた野菜がまさか人のためになるとは思わなかったの、水やりなどこまめにやればよかったと反省しています。だけど、ぶんじ食堂の方が私の作ったレシピをみてくれたので良かったです。 来年も野菜を作りたいです。	家事や介護をしている子どもたちがいることを初めて知りました。私たちが育てた野菜がぶんじ食堂の方々によって 少しでも困っている子どもたちの役に立ってほしい とおもいます。レシピ作りもがんばれて良かったです。
ウォールアート制作の感想	時間がたくさんかかってしまったけれどウォールアートが完成できてよかった。みんなで役割分担をしてやれたので達成感があります。 多くの人に見てほしい ので無事に掲示してほしいと思います。	ちぎり絵は1年生の時以来だったけど、美術の授業で習ったことを活かして一番良いものができたと思います。この作品を ぶんじ食堂の人や地域の人にたくさん見てほしい と思います。

普段からおとなしく、積極的ではない生徒Aの振り返りには「どうやったら伝わりやすいか見やすくなるかすごく悩んだ」「来年も野菜を作りたい」「多くの人に見てほしい」という感想が見られた。これは、体験的な活動を通して、社会の問題を「自分ごと」として捉え、自分にできることは何かを考えた成果であると考えている。そういった言葉が見ら

ただけでも、持続可能な社会の創り手に一步でも近づけたと評価している。また生徒 B は「外国人があせらないように」「少しでも困っている子どもたちの役に立ってほしい」「ぶんじ食堂の人や地域の人にたくさん見てほしい」など、常に子どもや外国人、地域の人々に向けたコメントなど他者の立場に立った発言が多く見られた。これは社会参加の機会が多く設定されていたことが大きな要因であると考えている。将来の社会生活を見据えた指導につながったという点で評価できると考えている。



生徒が作成した
避難所の貼り紙



実際にぶんじ食堂で
提供された料理



生徒が作成した
レシピ



生成 AI が考えた
ウォールアートの原画



作成途中の
ウォールアート

3. 成果と課題

最後に本実践の成果と課題について説明したい。成果は2点ある。

1点目は、教科で学んだ知識や技能を総合的な学習の時間での探究学習に生かし、また総合的な学習の時間での学びが教科に還元される場面が見られたことである。例えば、第二次で取り組んだ外国人向けの避難所の貼り紙を作る活動では、美術科において学んだデザインや色の種類、見やすさなどの知識を生かしながら知識を活用する場面が見られたり、第五次で取り組んだセサミストリークの授業では、総合的な学習の時間で学習してきた「誰ひとり取り残さない社会」の視点を活かし、社会科の授業で生かそうとしたりする場面が見られた。無理のない形で普段の授業と総合的な学習の時間の授業を融合させることで学びが深化されたと考えている。

2点目は、SDGsを切り口に身近な課題と自分とのつながりを実感することで「自分ごと化」させることを可能にできたことである。加えて、「ぶんじ食堂」など地域住民の方々との協働や「ウォールアート」を社会に発信するなど社会と接続した学びを推進したことで相手意識をもった行動や言動が多く見られ、学習意欲を高める要因になったと考えている。

次に課題である。課題は、授業の内容が高度化した場面に（例えば、外国人向けの避難所の貼り紙作成）については、個人でなくグループで課題解決に向かう設定にしたが、生徒によってはついていくことが難しい場面もあった。役割分担や問いかけを細かく設定することで、さまざまな形で「関わる場面」を増やせるように班編成やインクルーシブ支援員との連携が必要だと感じた。

4. まとめ

ここまで、特別支援学級におけるSDGs探究学習について、総合的な学習の時間を軸とした授業実践を報告した。単元全体を振り返って、特別支援学級の在籍する生徒の姿は実に多様であるが、問いかけや課題に対して時間をかけて、自分の考えを書いたり、体験から感じ取ったことを表現したり、仲間と対話を通して課題解決に向かったり、どの場面においても「言語活動」を充実させ、粘り強くスモールステップで取り組んでいくことで、自立・社会参加に向け、一人一人が力強く未来を生き抜く力を育成できると考えている。